



学校図書館だより



2016年9月23日
横浜市立森の台小学校
校長 田中 公明
図書主任 清水あゆみ
学校司書 近江弥穂子

No. 5

夏休みが終わり3週間あまり。日に日に秋らしい気候となりました。長い夏休み、じっくりと本を読むことはできたでしょうか。夏休みが明けた初日から、図書館はたくさんの児童でにぎわっていて、本に親しんでいる児童が増えていることがよくわかります。これからは「読書の秋」ですので、秋が深まっていく中で、さらに増えていくことでしょう。この時期に、家族で同じ本を読んだり、おすすめの本を読みあたりしてみたいかがでしょうか。お互いにお気に入りの一冊に出会えたら素敵ですね。

がっこうとしょかん 学校図書館からのお知らせ

●本を元の場所にもどしましょう。

図書館の本は左から右に並んでいます。ラベルをみて本のあるべき場所に
きちんともどしてください。

先生のおすすめ本

飯野先生 (5-4)	柏原先生 (4-2)	近江先生 (4-3)	山本先生 (4-5)
「ちょっと今から仕事やめてくる」	「星の王子さま」	「へんないきもの」	「はてしない物語」
北川恵海 著	サン・テグジュベリ著	早川いくを 著	ミヒヤエル・エンデ著

学校図書館にあり
ます

どん底に落ちても、自分を大切に想う人の存在が少しずつ自分を前向きに変えてくれる。そして、自分が自分らしく生きていけるように、自分で前向きな決断ができる。

本当に大切なものはなんでしょう?! 砂漠に飛行機で不時着した「僕」が出会った男の子は、自分の星を旅立って、いくつもの星をめぐるから七番目の星・地球にたどり着いた王子さまでした…

思わず「なんじゃこりゃ」と言ってしまうような生き物、うそのような本当の生き物たちが紹介されています。その紹介ぶりがとても愉快です。

小学生のとき、映画を観たあと、原作があることを知り、読んでみました。「ほんとうに本の世界に引き込まれてしまうのかな」とワクワクしながら読みました。

トピックス ～北条早雲（ほうじょうそううん）～

通称、北条早雲は、後北条氏（鎌倉時代の執権北条氏と区別してこう呼びます）の祖となった武將です。早雲により、東国の戦国時代はその幕をあけたと言えます。実は北条姓を名乗ったのは早雲の嫡男：氏綱からであり、生きていた間に「北条早雲」の名が使われた確実な史料はほとんどないそうです。今までの説では、早雲はただの浪人から戦国大名にまでの上がった下剋上の典型と考えられていましたが、最近の研究では室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏の生まれであるとされ、伊勢盛時と名乗っていたと考えられています。姉の北川殿の嫁ぎ先である駿河の今川家に跡目争いが生じた時に、京から向かい、その調停役をつとめています。一旦、今川家中に落ち着いた早雲は、やがてとなりの国の伊豆国（現在の静岡県の一部）に進出して、堀越公方、足利茶々丸を滅ぼし、これを奪います。さらに相模国（現在の神奈川県）に向かい、大森藤頼のいる小田原城を奪い取ります。小田原城は以後、ながらく北条氏の居城となります。早雲は、領国支配の強化を積極的に進めた初期の大名でもあり、その点から、戦国大名の先駆けと評価されています。「早雲寺殿廿一箇条」という家法を定めますが、これは分国法のはじめとなりました。この中には「上下万民に対し、一言半句であっても嘘を言ってはならない」という、文言が織り込まれていますが、これは早雲の政治に対する考えのとっかかりを表す例のひとつと言えます。実際、早雲は農民を大切に、善政を施したと伝わっています。早雲の後を継いだ氏綱は武蔵国（現在の東京都）へと領国を拡大し、以後、氏康、氏政、氏直と5代に渡って順調に関東地方（現在の関東地方）に勢力を伸ばしていき、後北条氏は武力制圧していくこととなります。北条早雲の伝記、ぜひ手に取ってみてください。

今月のおすすめの本

「ライフタイム」
ローラ・M
シェーファーマ

「ふしぎ駄菓子屋
銭天堂」
廣嶋玲子 著

「ゼツメツ少年」
重松清 著

一生の間に、トナカイの角は何回はえかわるでしょう？カンガルーは一生の間に何匹の赤ちゃんを産むでしょう？この本には、いきもの的一生を調べてわかったさまざまな数字が出てきます。いきもの一生にかくされた数字の不思議がわかる本です。

猛獣ビスケット、お天気あめ、仮病ラムネに怪盗ロールパン…幸運を求める幸運な人だけが見つけられる銭天堂には不思議な名前のお菓子が売られています。買ったお菓子が舌となるか凶となるかは、お客様次第です。

「ぼくたちはゼツメツしてしまいます。」ある小説家の元に届いた一通の手紙。ゼツメツしてしまうかもしれない2人の少年と1人の女の子のお話です。

編集後記

先日、没後20年となる星野道夫さんのエッセイ集、「旅をする木」を読みました。この本は、「旅する木」に「-」を加えて「旅する本」として、旅行者が本を旅先にもっていき、リレーのバトンのように本を渡していったりもされているようです。星野さんは、人間にはふたつの時間、「自然で流れる」と「毎日いろんなものに追われて生きている時間」があると書いています。私たちが毎日を生きているこの同じ瞬間に、アラスカや北海道などでゆったりとした時間がながれています。日常のなかで、はるかな遠い自然があるという意識を持つだけで、豊かな気持ちになれます。「旅をする木」の中には、雄大な自然と沢山心に染みる言葉がありました。よかったら是非手に取ってみてください。

学校司書 近江